
緋弾のアリ r y ~ 春に恋するお年頃 ~

鈴ノ音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

緋弾のアリィー 春に恋するお年頃

【Nコード】

N0655W

【作者名】

鈴ノ音

【あらすじ】

武偵高に通う主人公 春都。

彼の日常は

朝食の準備↓わずか五秒の食事時間↓遅刻ギリギリの快感↓日常・

・

ある日、親友のキンジを救おうとした事で彼の日常は変化を見せ始める

日常は変わりゆく（前書き）

この作品は鈴ノ音の妄想で展開いたします。

原作ブレイクを起こす可能性が100%を超えるでしょう
それでも読んでいただけるのなら幸いです。

前回はまさかの投稿失敗・・・本当にすみません・・・

日常は変わりゆく

トントントン・・・

朝、包丁の小気味いい音が聞こえてくる

「
　　」

それに合わせて鼻歌も聞こえてくる

それはまさに新妻が愛する夫のために朝食作っている・・・ような
そんな光景

ただ一つ違うのはそこで調理しているのがエプロンをした可愛い女
の子ではなく、身長180ぐらいの青年というところだけ。

この青年の名前は春都

武偵高に通う二年生である

春都「・・・よし、できた。じゃあいただきます！！！」

そして料理ができると春都は台所で朝食を猛スピードで食べていく

春都「ごちそうさま！やべ、遅刻する！！」

早い。時間にして約五秒ぐらいだろうか

何故彼がここまで急いでいるのか・・・それは彼が遅刻しそうだから

春都「ひってきまあゝひゅー！！」

そう叫び学校へと走り出す

その口にはお約束の食パン・・・ではなく歯ブラシが咥えられていた
だが一言言っておこう。

歯ブラシを咥えたまま走るのはとても危ないぞ！

・・・それはさておき

彼が学校へとダッシュしている時、一人の青年が自転車で激走しているのを目にした。春都はその青年に見覚えがあった

春都「・・・ふいんじふぁ？はれ・・・（キンジか？あれ・・・）」

だが、なんかおかしい・・・

激走している彼を追いかけるものの存在に春都は気付く

キンジは、え〜と名前なんだっけ・・・せ、セグウェイだっけ？に
後ろから追いかけていた

人は誰も乗っていない。そのかわりにサブマシンガンのUZIが取りつけられていた

春都「・・・？」

正直、いったいなにが起こっているのか理解ができないがとりあえず
我が親友であるキンジを救うべく春都はキンジを追いかける

かなりの速さで移動するキンジ達になかなか追いつくことができない
春都

春都「（ちっ！こうなったら撃ってセグウェイ壊すか・・・）」

春都はホルスターから銃を抜こうとしたしかしその時！！

春都「（やっべ、家に忘れた・・・）」

大切な大切な銃を忘れたのに気付いた瞬間だった

春都「（ど、どうするか・・・考える春都。）」

軽く焦っている春都。

そんな事をしていると、またもや目を疑うような事が起きる

なんと女の子が空から降って来たのである

いや、正確に言えばパラシュートを使い降りて来たのだが・・・
そしてその子はセグウェイに向かい発砲。見事破壊に成功した

これで一件落着。

と思いきやいきなり女の子が逆さ吊りになりキンジの腕を掴む

春都「（おいおい、なんかサーカスの真似か?!）」

そんな事を思った瞬間、キンジが乗った自転車が急に爆発

春都「なっ!?!」

いきなりの事に一旦理解ができなかったが、すぐに我に戻る

春都「（キンジ達は!?!）」

二人は爆風に巻き込まれ体育館倉庫に吹き飛ばされる

俺は二人の安否を確かめるため全力で体育館倉庫に急いだ

日常は変わりゆく（後書き）

初めまして鈴ノ音と申します。

小説を書くのは初めてだったのですが・・・どうだったでしょうか？
他の方の作品を読み、自分もこのような面白いものを書いてみたい
と思いやってみました。

つまらないかもしれませんが読んでいただければ嬉しいです

歯ブラシは意外に大切なもの・・・

吹き飛ばされたキンジ達を追いかける春都。

そして駆けつけるとそこには・・・

拳銃を片手に持つキンジと、いつの間に増殖したのかUZI搭載セグウェイ達がそこにいた。

つかセグウェイって分裂とかするの？

ま、いや

春都「ほーいふいんじいー！！（おーいキンジー）」
いまだに口には歯ブラシ・・・

俺は手を大きく振りながらにこやかに、そして爽やかにキンジの元へ走り寄ろうと・・・

ババババババツ！！！！

へ？

チュインっ！！

歯ブラシの柄に銃弾が掠った音がした

おいおい、少し落ち着けって

ババババババツ！！！！

春都「うおおおおおっ！！！！？？？」

バババババババツ！！

危険と察知したのか春都は体育館倉庫に向けもうダッシュ！
そして滑り込むようにして体育館倉庫へと入った

春都「ごく。・・・飲んじまった・・・」

キンジ「・・・何故、俺の腕を引っ張る必要があつたんだ春都・・・」

春都は体育館倉庫に入る際、キンジも一緒に連れ込んだのだった

春都「ん？だつて危な・・・ああ、今はあっちのキンジか」

春都は一人納得したようにそう呟く

「ちよつと！あんた何やってんのよっ！！」

そんな会話をしていると後ろからツインテールの可愛い女の子が現れた。

この子がさっきキンジを救った人物なのだろう・・・色々ちっちゃいのにすごいんだなあ（感動）

ジャキ

そんな事を考えていたら額に銃口を押しつけられた

春都「・・・すみませんでした」

キンジ「すまないアリア。今片づける」

キンジは悩殺スマイルを決め再び外へ出ていった
今のキンジの状態なら余裕だろうし、俺がする事はないな。

アリア「・・・ねえアンタ、いつまでそんな歯ブラシ啜ってんのよ」

春都「・・・へ？」

ツインテールの女の子が俺の額に銃口を押しつけたまま聞いてくる

アリア「だってそれ持つ所ないじゃない」

それを聞いた瞬間、俺の中に衝撃が走った・・・

柄がない・・・だと？

春都「・・・」

「ちよ、なんでそんなに落ち込んでるのよ！ただの歯ブラシなんだ
しまた買えば『だめに決まってるだろ』！？」

春都「・・・プレゼントされたもんなんだ」

〈回想〉

春都「なあキンジ！今日は何の日か知ってるか？」

キンジ「うわ、なんで満面の笑みなんだよ。知るかそんなもん」

春都「ひでーな。今日は俺の誕生日だろ？（キラキラ）」

キンジ「へー、おめでと」

春都「プレゼントないのかよ!？」

キンジ「んなもんあるか」

春都「そ、そんな・・・」

「ハルくん」

春都「この声は・・・よう理子」

理子「お誕生日おめでと」はいこれプレゼント」

春都「え？あ、うん・・・ありがとう」

キンジ「歯ブラシ？」

理子「虫歯になるなよ!」

春都「あ、はい・・・」(ω・)(しょぼん・・・

理子「・・・ぷっ!あははは、冗談だよ!!ホントはこっちだよ」

春都「ケーキ・・・」

理子「えへへ・・・初めて作ったから美味しいかわかんないけどね」

春都「理子さんきゅ！歯ブラシも・・・まあ大切に使うよ」

く回想終わりく

春都「・・・これ借りる」

そう言うとき春都は外に向かい歩き始めた

アリア「は？・・・っていつの間に私の銃！」

なんと春都はいつの間にか額に押し付けられていた銃を奪っていた

春都「すぐ返すからさ・・・ね？」

アリア「あつ・・・ちよつと！！」

く外

春都「おいキンジ。全部壊すなよ？」

キンジ「お怒りみたいだな春都」

春都「まあな。んじゃ適当に殺ってくるっ！」

春都はセグウェイに向け突っ込んでいく

当たり前だが搭載されているUZIは春都を狙いを定め・・・そして

ガガガガッ！！

乱射。

だが既にその場所には春都おらずセグウェイの真横に立っていた

春都「俺のお気に入りを壊したお礼だ」

ダンっ！ダンっ！！ダンっ！！！！

春都が放った3発の銃弾は確実にUZIを破壊、キンジもどうやら無事に残りを片づけてくれたらしい

春都「さすがキンジ、一瞬で4機も壊しやがったよ」

キンジ「そう言う春都も相変わらずの腕前だ」

春都「たまたまだよ『ちよつとアンタ達』・・・おつと面倒くさそうな予感！これ返しといて、俺は行く」

そう言つて春都はキンジに借りていた銃を渡す

春都「はははっ！さらばだ！！」

春都は壊れていないセグウェイセグウェイに乗り颯爽とこの場を後にした

歯ブラシは意外に大切なもの・・・（後書き）

くだらなくてすみません・・・

どうでしたか？

こんな作品になると思いますが読んでくれると嬉しいです

転校生の名は！神崎・・・えっと、なんだっけ？

春都「おはあゝ・・・」

セグウェイに乗ってきたためいつもより数分早く到着した春都

春都「ふうゝ・・・」

まるでオッサンの如く椅子に座る

理子「ハル君おはよ」

友達と話していた理子は春都の姿を見つけると笑いながら駆け寄ってきた

春都「ううゝ・・・理子おゝ（泣）」

理子「ど、どうしたのハル君?!」

春都「理子からもらった歯ブラシ・・・壊れちゃった」

理子「歯ブラシ?・・・もしかして誕生日の時ふざけて渡したあれ?」

春都「うん・・・（´・ω・｀）」

理子「本当に大切してくれてたの?ぶ、あはは!」

春都「だって理子がくれたもんだしい・・・」

理子「もうホントにハル君は可愛いなあ〜よしよし・・・」

理子は春都の頭を優しく撫でる

春都「ごめんよ〜（泣）」

理子「ん〜・・・じゃあ今日、理子とデートしたら許してあげる」

春都「デート？別にいいけど・・・」

そんな会話をしていると・・・

キンジ「は、春都てめえ〜・・・一人で逃げやがって」

疲れた顔したキンジが登校してきた

理子「あ、キー君！おっはよ〜」

キンジ「ん？理子はなんだか元気そうだな」

理子「えへ〜♪なんと今日はハル君とデートすることになったのです？」

キンジ「そうなのか」

春都「キンジも一緒に行くか？二人より三人のほうg」ハル君？
ど、どうした理子」

理子「理子はね〜・・・デートって言ったんだよ?」

理子の声のトーンはやけに低い

春都「ん?だっていつもみたいにゲームとか買いに行くんだろ?」

理子「むう〜!そうだけど、気持ちの問題なんだよハル君っ!」

春都「?」

キンジ「まあなんだ。俺は行かないから二人で・・・な?」

理子「うん・・・もうハル君の馬鹿っ!」

理子はそう言うときつぱを向いてしまった
なんかヤバい事した?俺

そんな事を考えているチャイムが鳴り先生が入ってきた
先生の話だと転入生が来るらしい。しかも女子
それを知った武藤は雄叫びをあげている

春都「転入生ねえ〜・・・」

確かにその響きは運命を感じずにはいられないが、果たして発狂するほどのものであるのか。

教室に一人の女の子が入ってくる

背は小さく髪はツインテール。その瞳は・・・ってあれ?なんかあの子見た事あるんですけど

春都「おいキンジ・・・あれ」

キンジ「言っな」

キンジは頭を抱え俯く

アリア「私アイツの隣がいい」

色々小さい子はキンジを指差し言う

春都「ご指名だぞ」

キンジ「言っなあゝ!!」

ヒステリックな声をあげるキンジ。

そして武藤は空気を読んでか自分の席を譲る

武藤よ。今のお前の好意（行為）はキンジにとって有難迷惑だぞ？

アリア「はい、これさっきのベルト」

転入生はキンジの目の前まで歩いて行くと、ベルトを投げ渡した

理子「理子わかった！わかつちゃった！！これフラグばつきばきに立ってるよお！！」

いきなりそんなこと言いながら席から立ち上がる理子

理子「キー君ベルトしてない。そのベルトをツインテールさんが持ってきた・・・この謎はつまりっ！」

「キー君が彼女の前でベルトを取るような事をしたって事だよぉ」
？」

理子が身体をくねくねとさせる

春都「そうなのか。キンジおめでと〜今日は赤飯だな」

二人の発言により騒がしくなる教室。聞こえてくるのはキンジへの罵声

キンジ「お、おい！待ってくれよ！？つーか春都は知ってんだろっ
！！」

春都「ん？俺はあの場所に少ししかいなかったから」

キンジ「なあっ！？」

バンツ！バンツ！！バンツ！！

だがこの騒ぎも何発かの銃声によって打ち消される事となる

アリア「れ、恋愛なんてくだらない！ぜ、全員覚えときなさい！そういう馬鹿な事言っやつは風穴開けるわよ！！」

バンツ！！

理子「ひ、ひえええ〜」

理子は腰を抜かしたように自分の席に座り込んでしまう。いつもなら俺のところに抱きついてきたりするんだけどな〜・・・やっぱま

だ怒ってるのかな？

静まり返るクラスメイト・・・ヤバいな、ここは俺がなんとか場を和ませねば

春都「まあ落ち着けよ」

春都は席を立ち彼女の前まで行き肩を掴む

アリア「な、なによ！」

春都「色々大変だとは思うけど（小さい的な意味で）元気な赤ちゃんを産んでくれ（ニコ・・・）」

静寂に包まれるクラス

春都「俺は女の子がいいな。えっと・・・神崎Hなアリアさん？」

アリア「・・・ね。」

春都「え？」

アリア「死ねええ！！！！！」

そう聞こえた時には綺麗な一本背負いが決まり俺は地面に叩きつけられていた

あ、やべ。意識が・・・

「はるk・・・n!!はるk・・・!!ハルくゝんっ!!」

意識を失う寸前、理子の心配そうな顔が見えた気がした

ヤンデレ?いいえ、デレヤンです(前書き)

前回あらすじ

春都「Hなアリアちゃん(キラッ)」

アリア「死ねえええええっ!!!!」

春都「神は言っているここで死ぬんめ・・・がく」

理子「ハルくうくん!!!!」

ヤンデレ？いいえ、デレヤンです

春都「はっ！知らない天井・・・」

目が覚めるとそこは一面荒野が広がり・・・

なんて事はなく、明らかに保健室だろう。まったくHちゃんは少し乱暴だな・・・

身体を起こそうとするがお腹のあたりがなんか重い
その原因を探るため手を動かすと・・・

何かサラリとした感触。おそらく誰かの髪だというのはすぐにわかった

ならこれは誰なのか？

答えなどすぐにわかる。こんなことする奴はたった一人だけだからなあ・・・

春都「おい理子、起きろ」

・・・返事がない

耳を立てると微かに寝息が聞こえてきた

寝てんのかい・・・まあ起きるまで理子の柔らかくて気持ちのいい髪を撫でているか

春都「ふふ」

理子「すう．．．すう．．．」

春都「ふふふzzzz」

気付けば再び夢の世界へ旅立って行った春都だった．．．

春都「はっ！知らない天井．．．」

さすがに二回目はネタのキレが下がるが、言わずにはいられない魔法の言葉．．．

ケータイを見ればすでに学校が終わる時間

春都「いい加減起きなきゃな．．．理子は．．．あれ？いない」

お腹のあたりにあった重みも気付けばなくなっている

帰ったのなら仕方ない、もう少しここで寝て．．．

理子「すう．．．すう．．．」

あれ？なんで理子が横で寝てんの？

おkまずは落ち着こう。

ムニムニ．．．理子の頬つぺたをひっぱり集中する

うむ。よくのびるし柔らかい、それに肌もつるつるぷにぷに・・・

春都「間違いない！理子だ！！」↑混乱

理子「むうううう！！」

春都「はははっ！理子、お前の（頬っぺた）は最高だ！俺の（指）に吸いついてくるようだぜっ！！」

理子「やあゝっ！！」

春都「はは！いいぞ理子おゝ！！」

理子「ふあっ・・・ああああっ！！」

二人「はあはあ・・・」

春都「・・・くだらね」

春都は一言そつ呟き保健室を後にしようとする

理子「ちょ、ちょっとハル君！無反応っ！？」

春都がベットから起きるとすぐに起きる理子。どうやら寝たフリだったみたいだ

春都「どう反応しろと？言ってみ理子りん」

理子「もう我慢できない理子！お前の全てが欲しいとか・・・俺のマグナムが（ry」

春都「そういうのはR18のほうでやらなきゃ」↑メタい

理子「あ、そつかあゝ・・・」

一体なんの話をしているのに納得したのは置いておこう

春都「理子はいつからここにいたんだ？」

理子「ん？ハル君がだらしく気絶した時からだよ」

春都「そうか。まったくHちゃんは少し荒い性格の様だ」

理子「あれは完璧にハル君が悪いよ」

春都「何が？」

理子「ツインテールさんの名前は神崎・H・アリア、Hなアリアちゃんじゃないよ？」

春都「あだ名かと・・・」

理子「そんなあだ名ないよ普通・・・それにいきなり赤ちゃん欲しいなんて言っし」

ジト目の理子

春都「あれはそういう意味じゃなくてだなあ……」

理子「じゃあどいう意味？あれは完璧にプロポーズだよ」

その額には薄らと青筋（怒りマーク）が見える

春都「あ……場を和ませようとしてだなあ……」

理子「へえ……ハル君は場を和ませるためにプロポーズしちゃうんだね」

視線はもはや絶対零度……

理子「ハル君への好感度が急降下だよ、このままだとBAD END 直行だよ……」

さすがの春都も理子がふざけてこんな事を言っているのではないと
気付く

目がマジだ。

いつもの理子からは考えられないような威圧感というのだろうか？
それがヤバイ

春都「……だが俺はそんな状況を覆すようなイベントを発生させてやるぜ」

理子「……へえ。で、なに？」

春都「朝の約束だ。理子、デートするぞ！」

ヤンデレ？いいえ、デレヤンです（後書き）

ちわです鈴ノ音です。

どうでしょうか？そもそも読まれているのかこの小説。

とりあえず楽しんでもらえればいいのですが・・・

意見や要望、その他に聞きたい事があればお願いします

コメントお待ちしております！

次回は理子りんとデートおおおっ！！！！

青い春の1ページ

春都「理子、デートするぞっ!」

その一言で始まったデート・・・

春都「といっても何の計画もないんだよな」

理子「・・・」

理子はジト目だし、じゃべらないし・・・
どうしたものかなあ。

あ、そうだ。

春都「手・・・つながか」

理子「!」

春都は理子の手を優しく握る

理子「・・・っ／／」

春都「ん・・・なんか違う。あ、こうか」

そう言つと春都は手の握り方を変えた
それは俗に言う 恋人つなぎ と言つやつた

理子「っ！は、ハル君！？」

それにはさすがにだんまりを決め込んでいた理子もすかさず顔を赤くしながら口を開いた

春都「やつとしゃべったな。だけど、だからといってこのつなぎ方は変えないぞ？」

理子「むう・・・これだけじゃ理子の心の傷は癒えないんだよ？」

春都「じゃあ理子はなにがしたい？」

理子「ハル君と一緒にパフェが食べたい！」

春都「パフェ？別にいいけど・・・」

理子「じゃあ行こっ！」

理子はそう言つと走り出した

春都「ちょ、理子落ち着け！パフェは逃げないぞお！？」

春都「・・・なるほど」

こういう事かあ・・・
目の前に置かれたとでかいパフェ。カップル様限定と言われて付い

てきた、飲み口が二つ付いているストロー（正式名称　ベアストロー）が浮かんだジュースが運ばれてきた

理子は最初からここに来るつもりだったのか

理子「ハル君、理子ジュース飲みたい」

春都「目の前にあるだろうが」

理子「このストローは二人で吸わなきゃ飲めないんだよ」

な、なんと・・・

理子「んっ」

ストローを咥えこちらを見る理子
上目づかいとか・・・いいな、おい

春都「や、やらなきゃだめ？」

理子「んっ!!」

先ほどの　んっ　とは違い、どうやら怒っているらしい・・・

春都「わかったから・・・ほら」

春都は顔を前に突き出しストローを咥えた

ちゅっ・・・

そんな音と共にグラスのジュースが減っていく

理子「ちゅぱ・・・」

理子がストローを離すと同時に春都も口を離す
うゝむ・・・これは意外と恥ずかしいな

ストローを咥える際に理子との距離が近くなる。近くなると理子の
甘い香りが鼻腔をくすぐる。

この香りは思春期真っ盛りな高校生・・・つまり春都にも

春都「じゅる・・・」

・・・どうやら春都には目の前の大きなパフェしか見えてないようだ

理子「もおゝハル君、子供過ぎだよ・・・ハル君あゝん」

理子は軽く怒りながらもスプーンで生クリームを取り春都の口に近づける・・・

春都「ぱくっ!!」

勢いよく食いついた。春都は甘いもの・・・特に生クリームが大好きで一度、理子の制服のフリフリが生クリームに見えて襲いかかったのはいい思い出だ

春都「うゝ」

理子「・・・（可愛いかも・・・）はい次あゝん？」

春都「はぐっ!!」

もきゅもきゅ」

理子「か、可愛い／＼／」

理子は自身を抱きしめクネクネと身体をよじる

春都「・・・(じいい〜)」

理子「あ、ごめんねハル君。今あげるか『理子』?」

春都「あ〜ん」

春都は笑顔で理子の口元へスプーンを運んだ

理子「え?」

春都「あ〜ん」

理子「あ、あ〜ん」

はむ・・・

春都「どう?」

理子「あ、甘いです・・・」

春都「そっか」はいもう一回あ〜ん」

理子「つ、次は理子の番!」

こうして二人はパフェを食べさせあった
店にいた男共は春都に「リア充爆発しろ」怨念を送ったそうな

~~~~~

春都「さて、もうこんな時間か・・・」

パフェを食べ終え春都達は帰り道を並んで歩く。もちろん手はつないでいる

理子「・・・」

春都「まだ機嫌直らないか？」

理子「（ふるふる）」

頭を横に振る

春都「じゃあどうしたんだ？どこか痛いかな？」

理子「違うよ・・・なんか淋しいかなあゝって」

春都「淋しい？」

理子「うん、もっとこうしてたいのになあ・・・」

そう呟く理子の顔はとても悲しそうで

それでいて美しかった・・・

春都「変な理子だ」

理子「ひどいな、理子だってこういう時もあるんだよ？」

頬を膨らまし春都を睨む

春都「だけど理子には似合わない」

「だからもう一度デートをしよう。今度は俺から誘う」

春都は優しく笑う

理子「ほんとっ！？約束だよ？約束だからねっ！！」

春都「はいはい。じゃあ約束の・・・」

この時、春都は理子から借りたゲームのワンシーンを思い出した  
ゲームの主人公は約束の時なんかしてたな・・・なんだっけ？

・・・ああー思い出した。確かこうだ

春都はつないでいた理子の手を引っ張る

理子「きゃっ！」

そしてもう片方の手を理子の腰へと回す

春都「約束しなきゃ・・・」

春都の顔は理子の顔へと近づく

理子「は、ハル君・・・」

理子の瞳には薄らと涙が浮かび、頬は朱に染まる。呼吸が少し早くなっているのは気のせいかな？

理子は瞳を閉じ、唇を少し突き出す

夕日に照らされ、二人の影はどんどんと重なっていく

そして

ちゅ・・・

理子「ん・・・！」

春都は理子のおでこに軽くキスをした

春都「約束のでこちゅー完了！」

そう言う春都はすつきり爽快笑顔

理子「う、うううううううう！！！！」

ポカポカポカ

理子は涙目で春都の胸を叩く

春都「怒るな怒るな、唇は本当に好きな人にしてもらえ」

春都はそう言う走り出す

理子「ハル君のばかつ！バカッ！！大馬鹿あゝっ！！！！」

それを理子が両手を挙げながら追いかける

今日はそんな青春の1ページを紹介・・・・・・・・

## 青い春の1ページ（後書き）

ちわです、鈴ノ音です。

理子りんキャラ崩壊してね？

感想、意見要望お待ちしております！

実はこの部屋・・・アレが出るんだ・・・(前書き)

今回はオリキャラが出ます

実はこの部屋・・・アレが出るんだ・・・

理子との追いかけてつこを終えた春都は自分の部屋へと帰りリビング  
でお茶を飲んでいる

春都「ずずず・・・ふう、世界は平和だなあ」

今日の朝とんでもない事件にあっているのにコイツは馬鹿なのだろ  
うか？

春都「ようかんが食べたい・・・待てよ？確かこの前」

そう言うとき春都は立ち上がりキッチンへと駆けてゆく

春都「ふふふ・・・見つけた！この前買った高級ようかん！！」

たかがようかんでここまで喜べるのはある意味才能かもしれない

春都が一人で大はしゃぎしていると・・・

ピンポン

来客を知らせるドアチャイムの音がした

誰だろうかと思いつながらドアを開けると

キンジ「よお・・・」

そこには疲れた顔をしたキンジがいた

春都「はいよ」

とりあえずキンジを部屋に上げお茶をだす

キンジ「悪い・・・ずず・・・はああゝ・・・」

キンジは一口お茶を啜った後に大きなため息を吐く

春都「どうしたキンジ、なんかあったか？」

キンジ「色々ありすぎだろ・・・武偵殺しとか」

春都「ずず・・・でもそれじゃないんだろ？」

茶を啜りながら春都は目を細める

キンジ「・・・神崎のヤツが部屋に押し掛けてきたんだ・・・」

春都「ほあ・・・」

キンジ「いきなり来たと思ったらドレイにれたの、強襲科《アサル  
ト》で自分のパーティに入れとか・・・くそ、意味分からんっ！！」

春都「“アレ”を見せてたからなあ」

春都が言うのであれば、キンジが持つ特性の事。

ヒステリア・サヴァン・シンドローム というらしいのだが、詳しく説明するのは面倒なので軽く説明すると

性的に興奮するとキンジは、この状態になる。

この状態のキンジは超人的に強くなり、そして・・・キザ男になるのだ！

キンジ「・・・本当に厄日だ今日は」

春都「落ち込むなキンジ、なんとかなるさ」

キンジ「他人事みたいに・・・神崎のヤツ、お前のことも言ってたぞ？」

春都「へ？」

ようかんを食べようとしていた春都は素っ頓狂な声をあげる

春都「いやいや、俺はただのEランク武偵だぞ？」

キンジ「俺もだ」

春都「いやでもさあ・・・」

キンジ「諦めろ」

まいったな・・・春都は苦笑いしながら頬を掻く

帰る前にした理子との会話を思い出す

理子「いいハル君、アリアに手を出しちゃだめ！」

春都「ださねーよ・・・」

理子「アリアはキー君とくつつく運命なんだよ！わかった？」

春都「あゝ、はいはい」

理子「理子言ったよ？“アリア”には近づかないでって・・・」

・・・あの時、理子の真剣でなんだか不安が見え隠れしている瞳が忘れられない

春都「あゝ・・・やっぱり無理だわなあゝ」

もぐもぐとようかんを食べる春都

春都「俺とHちゃんは100%合わない」

キンジ「なんでだよ」

春都「キンジ、俺は好きな言葉が3つあるんだ」

「『ムリ』『疲れた』『面倒くさい』この3つ。普通っぽく  
ていいだろ？俺にピッタリだ」

そう言う春都はもう一つようかんを楊枝で刺し口に運ぶ

キンジ「なにが俺にピッタリだ・・・お前ほど普通じゃないヤツな  
んかいねーよ」

春都「普通も普通、超ノーマルだぜ？俺は。おっと急須にお茶がな  
いな・・・淹れてくる」

春都はキッチンへと歩いて行った

キンジ「それにしてもなんでこの部屋は誰もいないんだ？」

キンジが先ほどから思っていた事を春都に聞く  
この部屋は大きく自分が使っている部屋と同じ4人部屋だった

春都「あゝ、みんな違う部屋行っちゃったんだよ」

キンジ「なんで？」

春都「出るんだよこの部屋」

キンジ「はあ？なにが？」

春都「お前、出ると言ったらゴキブリか幽霊のどっちかだろ」

春都はポットを押しながら言う

春都「この部屋、出るんだ “幽霊” が」

それを聞いたキンジは少しびくつく

キンジ「ば、馬鹿言ってんなよ、幽霊なんているわけないだろ」

そう言うキンジだがやけにキョロキョロし始める

そしてキンジはある一つのロッカーで目がとまった

キンジ「(ゴク・・・)」

「がたっ！」

キンジ「(びくうつ！!) は、春都！？その幽霊ってどこに出るんだ？」

春都「あ？ロッカーだよ」

キンジ「(お、おい・・・まじかよ・・・)」

キンジの顔はみるみる青くなる

「がら・・・」

ロッカーがひとりで少し開いた

キンジ「は、春都？まだかつ！？」

春都「待て、今ようかんをだな……」

そしてその隙間から白い手が……

キンジ「春都……早く……幽霊がつ……手があああああつ……！！！！！！」

春都「あ？どうしたキンジ、顔真つ青だぞ」

キンジの悲鳴にも似た叫び声を聞き春都は急須と切ったようかんを持ちリビングに戻って来た

キング「手！手がつ！！！」

キンジはロッカーを指差し言う

春都「手？」

春都もキングジの指さす方を見ると・・・

うねうね

ロッカーの隙間から出た白い手は何かを探るように動いていた

春都「こら、お客さんを怖がらせるな」

びく！　　すすす・・・

春都がロッカーに向かい怒ると手はロッカーの中へ戻っていった

春都「まったく・・・大丈夫か？キンジ」

キンジ「な、なんだあれ！？」

春都「幽霊」

春都は座ると再びお茶を啜り始める

キンジ「おま、幽霊と話せんのか！？」

春都「そーなのか幽霊？」

ロッカーの中「・・・・・・・・・・さあ？」

返ってくる返事

春都「どうやらわからないみたいだ」

キンジ「お前しゃべってんだろ！！つーかそれ本当に幽霊なのかつ  
？！」

春都「自分で幽霊って言ってたぞ?」

キンジ「……あの幽霊さんとやら、ロッカーから出てきてくれな  
いか?」

キンジは軽くビビりながらも会話を試みよつとする

ロッカーの中「……」

返事は返ってこない

春都「ずず……」

キンジ「……」

長い沈黙が続く

春都「ようかんやるぞ?」

ガラ!

その一言でロッカーが勢いよく開き、そして・・・

幽霊？」・・・」

小さい銀髪の少女が姿を現したのだった

## 幽霊幼女

幽霊？「・・・」

その幽霊？容貌はとても幼く長い銀の髪がとても美しい。  
顔はまるで人形のように整っていて、目はたれ目

たたたっ

銀髪の幽霊は小走りで春都に近寄り

幽霊？「・・・」

座った

幽霊「はむはむ・・・」

自称幽霊ちゃんはようかんを可愛らしく食べていく

キンジ「・・・春都？」

春都「なんだ？キンジ」

キンジ「誰？」

春都「・・・」

春都は目を閉じて良く考える。彼女はいったい誰なのか・・・  
そして出た答えは

春都「幽霊？」

疑問形で返ってきた

キンジ「・・・名前はなんていうんだ？」

キンジは春都は役に立たないとわかったらしく、彼女へと質問する

幽霊？「・・・・・・・・・・ユウ」

キンジ「ユウ？幽霊じゃないのか？」

ユウ「・・・レイ」

ユウという少女がそう言う

ガラ・・・

幽霊2「・・・ぐす」

半べそ気味の少女がロッカーから現れた

キンジは心の中で

・・・あゝ、なんとなくわかった。こいつらは幽霊じゃない

ユウとレイっていう名前なだけだ

と呟いた。

キンジ「改めて・・・二人の名前は？」

幽霊1「ユウ」

幽霊2「レイ・・・ぐす」

キンジ「・・・だそうだ」

春都「そうか」

春都は興味なさそうにお茶を啜る

キンジ「なんでお前はそんなに興味がないんだ」

春都「俺、コイツらの事知ってるし。コイツらがロッカーに出る幽霊の正体・・・まあ幽霊じゃないんだけど」

二人の顔を見ながら呟く

キンジ「結局コイツらは何者なんだ？」

春都「ロッカーに住みついている双子姉妹。趣味はネットサーフィン、ゲーム、その他色々・・・得意技は料理の盗み食い」

ユウ「ずず……」

レイ「ぐす……」

キンジ「……なんでロッカーの中に住んでいるかは？」

春都「知らん」

キンジ「……はあ……」

長い沈黙の後、キンジは頭を押さえながら深いため息を吐いた

キンジ「本当にお前は……仮にこの二人が危険人物だったらどうする気だ？」

春都「どうもしないぞ？コイツらがなんだろうと俺は構わないし、  
……し……（ボソ）」

キンジ「なんだって？」

春都「なんでもないよ、とりあえず俺はコイツらを気に入ってるんだ」

この可愛い容貌も、双子ってところも、俺の“役に立つ”ってところも……

俺はそう言い無表情でようかんを食べるユウ（銀髪の子）  
さつきから半べそかいているレイ（黒髪の子）  
の頭を優しく撫でた。

ユウ「・・・もぐもぐ・・・」

レイ「やあゝ!!」

春都「お前はなに怒ってんだ」

レイ「春都が怒った・・・」

春都「お前がキンジを脅かすからだろうが」

レイ「暇だったんだもん・・・」

春都「・・・はあ。さっきは悪かったなキンジ」

春都は苦笑いしながらキンジに謝る

キンジ「別にいいさ。（結構怖かったけどな・・・）それにしても  
なんか兄妹みたいだな」

春都「そうか？」

キンジ「どこからどう見ても兄妹だよ」

そう言つとキンジは席を立つ

キンジ「そろそろ帰るわ。アイツもう帰ったかもしれないし」

春都「そうか。まあいつでも遊び来てくれ、待ってるからさ」

キンジ「ああ、また今度な」

キンジはそう言い残し帰って行った

春都「兄妹・・・か」

他の人間にはそう見えるのか

春都「ユウ、レイ、仕事だ。」

二人「」（びく）「」

先ほど、部屋に流れていたゆったりとした雰囲気はその一言で一瞬にして変わる

春都「神崎・H・アリアについて調べる。奴の情報全部」

ユウ「・・・報酬は？」

春都「報酬？そつだな・・・レイなにがいい？」

レイ「ごはん！-」

春都「だそつだ」

レイ「・・・了解。・・・（レイの馬鹿）」

本当に役に立つよ。

これでHちゃん目的がわかる・・・さあいたいHちゃんはなにがしたいんだ？・・・

## キャラ紹介（前書き）

タイトル通りキャラ紹介です。

## キャラ紹介

ちわです鈴ノ音です。

この小説を書いている者です

読んでくださっている方々・・・楽しんでもらっているでしょうか？  
楽しんでもらえているならば光栄です

お気に入り登録してくださった方々、ありがとうございます。

メッセージが送信できる方にはお礼のメッセージを送らせてもらってます

迷惑だったらすみません・・・

とりあえず主人公、オリキャラの説明を・・・

### ・春都

この小説の主人公。 探偵科 ランクはE

身長は180?ぐらい

主に使う武器は不明 大抵のモノなら余裕に扱える。 一度だけ日本刀を使うのをキンジが目撃

中途半端というかい加減というか・・・正直掴みどころがない性格をしており、どんな人間にも合わせる事ができる。

キンジとは入試試験の時に春都が一方的に気に入りキンジを親友と呼ぶようになる

軽く真剣になると口調が少し変わる

他にもチートっぽい能力を検討中・・・

ユウ・レイ

オリキャラ

春都の部屋のロッカーに住んでいる双子の姉妹。身長はアリアよりもう少し小さい、だが胸は・・・ごはっ!?

春都の部屋のルームメイトが次々と逃げ出した原因。

幽霊と思われていたが、ある日春都に発見される

見た目はただの子供だが、正体は伝説の情報屋。

情報収集やハッキング等の能力に長けよく春都に仕事を頼まれる。

通常の場合、高額な報酬を請求するのだが住まわせてもらっている

恩を感じているのか春都には比較的に安い報酬で仕事をこなす

こんな感じですかね？

ちなみにこの作品のヒロインは理子りんです。

他にも誰がいるか考えているんですがね・・・

ちなみに鈴ノ音は銃の名前とか全然詳しくないです。

知ってるのデザートイーグルくらいだもん

鈴ノ音、今原作頑張って読んでます!!

きつとどこかでおかしいところでできますし、ちゃんとやらなきゃ・

あと多分、原作通りにならないかも・・・

こんな作品ですがどうかよろしくお願いします!!!

意見要望、感想質問お願いします

W A W A W A ♪

神崎・H・アリア

身長142センチメートル

専門科目 強襲科 ランクス

14歳からロンドン武偵局の武偵としてヨーロッパ各地で活躍、狙った相手を99回連続で全員逮捕。その間1度も犯罪者を逃がしたことがない・・・

武器は二丁拳銃と小太刀二刀。二つ名は「双銃双剣のアリア」

くだらん・・・俺が知りたいのはそんな事じゃないぞ？

春都はユウとレイが集めた情報資料を眺める

そして春都はある場所で目をとめた

神崎

かなえの事が書いてある部分だ

懲役864年ねえ・・・終身刑と同じだろこれ。

その資料には神崎かなえがしたとされる罪が書き記されている

その中には武偵殺しの罪もあった

資料を読み進めるにつれ神崎・H・アリアの目的が見えてきた

なるほど、Hちゃんは神崎かなえ・・・自分の母の冤罪を晴らすため罪を着せたとされる秘密結社『イ・ウー』のメンバーを追って

ると。

だからHちゃんはそれに協力してくれる仲間、ドレイを探している。  
いや、Hちゃんじゃないな。

ホームズちゃんは・・・ワトソン君探し（相棒探し）でもしてるの  
かねえ・・・

俺は軽く笑いながら読みかけの資料を閉じる

春都「面白いな・・・ホームズか、もしかしたらリュパンもいたり  
して・・・な〜んてな」

???「くしゅっ！」

キンジ、本当にお前は面白い奴だ。

お前は随分と面倒くさそうな事に巻き込まれているぞ？

お前の意思には無関係でな・・・

春都はベランダに出て夜空を見上げながらそう思った

p i p i p i p i . . . .

目ざましが鳴りベットから出る

昨日はベランダで星を見た後、すぐに寝た

今日もまた面白い事が起きればいいんだけどな。まあキンジといれば嫌でも起きるか

俺はとりあえず朝食を作るため、寝室から出てリビングへと向かう。すると・・・

ユウ「すう・・・」 レイ「くう・・・」

そこにはリビングのソファーの上で丸まって寝る二人の姿があった机の上にはまだ俺が読んでいないHちゃんについて資料が机の上に散乱している

春都「・・・運んでやるか」

一人ずつお姫だっこをしてやり、先ほどまで俺が寝ていたベットに寝かして毛布をかけてやる

春都「さんきゅ・・・」

二人をベットに運んだあとはいつものように朝食を作って食べ、学校へと向かった

ふむ、今日はいつもより随分と出るのが早い。

これなら完璧に遅刻はないな・・・そんな事を考えていると

前に知っている後姿があつた。間違いない、あれは我が親友キンジと暴力魔のHちゃんだ

一瞬声をかけようか迷つたが・・・ふつ、二人の大切な時間を割こうとするほど俺は馬鹿じゃない

春都「あばよ親友」

前の二人を追い越しキンジへウィンク。

キンジ「なっ！おい春都！！」

春都「ごゆつくりいゝ！！！！」

キンジ「待て馬鹿っ！」

一日一善・・・やはりいい事するに限るな！でもキンジの奴、俺に向かつて馬鹿とか言わなかったか？  
・・・気のせいだよな

春都「おはよゝつす」

理子「あ、ハル君おはよゝ？」

飛びついてくる理子をヒョイツと避け

春都「はい、おはよー理子りん」

理子「うん！おはよーハルくん！」

春都「ああ、おはよー理子りん」

ヒョイ

理子「おはよー！！ハル君っ！！」

春都「ちょっとしつこいぞ？理子」

理子「ハル君が避けるからだよー！」

両手をあげて怒っている事をアピール

理子「ふふ・・・こうなったら理子の真の力を見せる時が来たみたいだね・・・」

理子是不敵な笑みを浮かべる

理子「ふふ・・・この理子海王の力見せてやる！くらえーグルグルパンチ！」

とある漫画の技をパクリ襲ってくる

春都「まさか理子は海王の称号を持っていたのか・・・っ！ふっ・・・いいぜ、なら俺も見せてやる！」

理子「そ、その構えは〜!!」

春都「トリケラトプス拳!」

ここまで悪ノリしてくれると清々しいものである・  
こうして中国4000年の歴史が崩壊し繰り出された攻撃と、魔術  
師範馬刃〇の拳法により創られたトリケラトプスが今まさにぶつか  
ろうとしている

理子「ぐるぐる〜!!」

春都「トリケラトプス・・・と見せかけてベアハッグ〜」

そう言う俺は理子を抱きあげた

理子「きゃあ!?!・・・む〜これベアハッグじゃなくてだっこだよ  
お〜」

春都「理子は軽いなあ〜」

笑いながらくると回る

理子「ひゃ〜」

キンジ「・・・お前らなにやってんだ?」

気が付くとHちゃんと一緒に登校していたキンジが俺達を見ていた

まるで馬鹿を見るような目で・・・

理子「おっはよー！なにつて、だっこだよお」

春都「違う、ベアハッグだ。青春はできたか？キンジ」

キンジ「あぁどこかの馬鹿な！春都の！おかげでな。まったくいい迷惑だ」

春都「どこかの馬鹿って言うてるけど俺の名前を強調して言うてる！！俺がその馬鹿の正体！？」

キンジ「よくわかったな、馬鹿のくせに」

キンジの冷たい視線が刺さる

春都「き、キンジの信頼が・・・俺に対する信頼があゝ・・・」

わざと崩れて見せる

もちろん理子に危険がないように

キンジ「もともとお前に対する信頼なんざこれっぽっちもないがな」

グサリ・・・

ふっ・・・意外に傷つく orz

アリア「コントはそれくらいでいい？」

どこから可愛いアニメ声が聞こえてくる

その正体はHちゃん、明らか俺を睨んでるね」

スク・・・俺は立ち上がり

春都「おはようHちゃん、昨日はよく眠れたかい？」

春都は先ほどとは態度が一変、笑顔となる

アリア「・・・まあまあよ」

春都「そうか、寝不足は美容の敵！とか言っし気を付けてね」

アリア「考えとくわ」

理子「・・・理子は昨日徹夜しちゃった」

その一言で再び俺の視線は理子へと移動する

春都「またゲームか？」

理子「ゝえへへ、イベントCGコンプするため頑張っちゃったのですビシッ！！」

理子は両手で敬礼

春都「こら、そういうことするともうゲーム買ってやらんぞ？」

理子「やゝん！もう徹夜しないゝ！！」

理子は俺の腕に絡みついて頬を擦りつける

理子はこの身長のせいでR15系のギャルゲー等は売ってもらえず、よく俺と買いに行ったりするのだ

春都「猫のしぐさに似てるな・・・よし、これからは理子りんじゃなくて理子にゃんと呼ぼう」

理子「にゃん」

春都「おゝよしよし、理子にゃんは可愛いなあ」

理子「ぐるぐる・・・？」

・・・ふう。さて今日も頑張っていきますかねえ・・・

W A W A W A ♪ (後書き)

ちわです。

お気に入りが増えてとてもうれしいです

意見、感想、要望などお書きください!!

## 嘘の本当

春都「はあゝ・・・終わった」

授業が終わり背伸びをする

春都「さて、今日は依頼おしごとでもこなすとするか・・・キンジはなに選んだ？」

キンジ「猫探した。悪いが早く行かせてもらっぞ？あの疫病神から一秒でも早く逃げたい」

春都「Hちゃんの事？」

キンジ「そうだ！もう行く、じゃあな」

キンジはそう言うと言つと早足で行ってしまった  
ちえっ・・・今日はキンジと一緒にやろうかなと思つたのに

春都「しょうがない俺は・・・これだな。“夫の不倫調査”・・・」

おもしろそうだな・・・

理子「夫の不倫調査・・・なんかおもしろそうだねえ」

理子の声がしたと思つたら後ろから顔を突き出し俺の依頼内容を見ていた

春都「なんだ、ランクAはAなりの依頼をこなせよ？」

理子「冷たいよハルくん．．．キー君なんかアリアと一緒に رفتだよ？」

春都「Hちゃんは強襲科だろ？なんで．．．」

理子「きつとデートだよ！だからあ．．．理子達もーて．．．あれハル君？」

春都「ふむ．．．どうやらこの時間帯に夫と不倫関係かもしれない女性が来るのか」

俺は軽く理子を無視し歩き始める

理子「待つてよハル君！」

---

春都「．．．はあ。なんでついてくるんだ理子」

理子「理子とハル君は一緒にいる運命なのです」

俺と理子はとりあえず依頼主の夫がよく通るといふ道をブラブラと歩いている

春都「邪魔するなよ？今日の飯にありつけなくなる」

理子「了解ですビシッ!」

春都「まったくお前は（どんっ!）おっと・・・すみません」

理子と話していたせいで前からくる男性とぶつかってしまった

男性「いや、こちらこそすまない。怪我はないかい？」

春都「大丈夫です。では・・・」

そう言い頭を下げて再び歩き始める

理子「大丈夫？」

春都「ああ。さて、少し疲れてきたから喫茶店にでも寄るか」

理子「わーい!理子ショートケーキ食べたい!」

春都「いいな、俺は・・・チョコレートパフェにしようかな」

そんなことを話しながら俺達は近くにある喫茶店へと入った

理子「おいしい♪ハル君もあ〜ん・・・?」

春都「はむ・・・やっぱり生クリームは最高だな!はいあ〜ん・・・」

「

理子「はむ!ん・・・ハル君のチョコパフェもおいしいね」

春都「そうか」

こうして理子と俺は世間話などして時間を潰した

春都「さて、そろそろ帰りますか」

俺は席を立つ

理子「え？うん」

そして会計を済まし店から出ていく。もちろんおれの奢りだ

理子「ねえ依頼は大丈夫？さっきのお店に依頼主の旦那さんいたよね？」

隣を歩く理子は不思議そうな顔をして訪ねてくる

春都「ん？大丈夫。旦那さんは白、いい人だったよ」

理子「え？どどういう事？」

春都「これ付けといた」

春都はそう言うとして小型盗聴器を親指ではじいた

実は店に入る前にぶつかつた男性・・・それが今回の標的である依頼主の夫。

それでわざと標的にぶつかり盗聴器を取り付けたのだ

春都「他の女性に会っていたのは妻のにするプレゼントの相談。若い子に聞いた方がいいからだそうだ」

頭の上で腕を組みながら歩く

理子「・・・ハル君は本当はすごい人？」

理子はそう言うといきなり立ち止まる

春都「理子？」

理子「ランクEの武偵があんな動きできるってすごいことだよ？それにハル君、キー君が武偵殺しの被害にあった時一緒にいたでしょ？」

自慢ではないが俺は雰囲気を読むのが得意だ  
ほんの少しの相手が出す雰囲気を感じ取れる。だからわかる今の理子は理子だけど理子じゃない・・・

裏にいる理子。

時より見せるこの顔・・・瞳の奥にある狂気と深い闇・・・

そう、まるでお前は・・・

理子「ハル君？」

春都「！どうした理子・・・」

気付いた時には理子の雰囲気は戻っていた

理子「なあゝんでもないよ、あ、そろそろバス停に着いちゃうね・・  
」

春都「また明日な理子・・・」

残念そうな顔をする理子の頭を優しく撫でてやる  
そうすると理子はくすぐったそうに目を細めて・・・笑った

理子「うん！また明日ねハル君！！」

そんなことをしていると、タイミングよくバスが来た。

理子「ハル君・・・危ない事はしちゃめっ！・・・だよ？」

理子は最後にそう言い残しバスに乗り込み行ってしまった

危ない事ね・・・いつたいなんだろうか？

春都「いい加減でてきなよHちゃん？」

アリア「・・・・・気付いてたのね」

しばらくするとピンク髪のツインテール・・・  
Hちゃんが現れた

春都「ん？まあ・・・ね。ここで待ってたの？俺のこと」

アリア「そうよ。」

あゝ・・・また面倒な。本当に面倒だ

春都「で？なんか用事？」

振り返った春都の顔は笑っている

アリア「アンタ、“気持ち悪いわ”」

春都「いきなり気持ち悪い!？」

アリア「アンタの表情も感情も。いつも仮面をかぶって自分を隠してるみたい・・・だから気持ち悪い」

・・・ああ、そういう事ね

アリア「アンタの事調べたわ。まったく役に立たなかったけど・・・」

当たり前だ。俺はキンジみたいに前はランクSでしたゝみたいのないし？

それにこちらにはチート幽霊さんだっている、俺の情報はほぼ無いに等しい

春都「まあ俺は普通の人間だしなあ」

とぼけた様な態度の俺をHちゃんはさらに鋭く睨みつける

アリア「嘘ね。わかるのよ直感で」

直感・・・ねえ？

アリア「アンタがどんなに隠したって私には分かる！」

そんなんで見破られるなんて面倒くさいな・・・

アリア「アンタ、私のドレイになりなさい！ドレイ2号！！」

いきなりドレイか・・・

流石にビックリだよ

春都「ちよつとまつて『拒否権はないわよ！！』・・・」

本っ当に面倒くさい・・・

おそらくこういう奴はどんなに言ったところで聞きやしない。

クソ・・・

春都「俺に何を望む？キンジだけで充分だろ」

一瞬にして感じが変わる春都

そのままアリアの横を通り過ぎて止まる

アリア「手駒は多いほうが決まってるわ。アンタはただ言う事を聞いてればいい」

春都「そんなの他のヤツでいいだろ？俺はパス」

アリア「言っただしょ、アンタに拒否権はない・・・言う事が聞けないなら」

春都「風穴か？」

俺は笑いながら二丁のガバメントを回して見せる

アリア「なっ！？いつの間に！！」

春都「ちゃんと気を付けてないと・・・ね？」

アリア「調子に乗るなっ！」

アリアは背中に隠してある日本の小太刀を抜き突進してくる

速いな。異常すぎる

バババ！！

それを少しでも勢いを殺すため先ほど拝借したガバメントで数発足元へ射撃するが、殺すどころか先ほどより速く鋭くなる

やばっ・・・

ビュン！！！！

体勢を横にずらし、紙一重で避ける

殺り合うつもりはない、なんとかして逃げる・・・

さてどうするか・・・

バックステップしてHちゃんの間合いから抜け出しながら考える

アリア「諦めなさい！私に狙われたのが運の尽きよ！！」

そう言いまた突っ込んでくる。イノシシかなんだな、コイツ・・・

突っ込んでくる小さなイノシシをしっかりと見据えて

春都「これ返すわ」

ガバメントをHちゃんに向かい放り投げる

アリア「！？」

いきなりの行動に一瞬戸惑い、そこに少しの隙が生まれる。

その隙を狙わないほど俺は馬鹿じゃない、先ほどと同じように足元へ一発撃ち込む

バン！

しかし先ほどと違うのはHちゃんがつんのめったようにして・・・

アリア「きゃうっ!」

転んだことだ

ころころと転がり・・・

アリア「へにゃ・・・」

止まった

春都「ほらよ、もう一丁返す。」

アリア「ううゝ・・・」

春都「じゃあ帰るわ・・・またなホームズ」

そう言い俺は歩きだした

アリア「私の事調べたのね・・・」

返事はしない、するつもりもない。

アリア「自分自身に嘘無理重ねて・・・自分を偽ってアンタ何になりたいわけ？」

・・・するつもりもなかったんだけどなあ・・・

春都「お前が言うように嘘を塗り重ねて違う自分を創っているとして・・・だ。それが誰にも気づかれなくてそれが俺だと思った時点でそれは嘘じゃなくなるんだよ」

春都「これは俺なんだよ」本当のな・・・

「

一言そう言い放った春都はもう振り向く事はなく歩いて行った  
アリアもなにも言う気はないのだろっ、その背中を見ているだけだった

春都の姿が見えなくなった頃

アリアは立ちあがりガバメントをホルスターに戻す。

よく見るとガバメントのマガジンは丁寧に抜き取られていた

アリア「・・・むかつく」

その一言が夕日の空に吸い込まれていった

## バスジャック

今日は雨が降っている・・・

朝から雨があゝ、今日はバスで行こうかな

そんなことを部屋の中で考える俺、春都は茶を啜る。

ユウ「はもはも・・・」　レイ「もきゅもきゅ・・・」

幽霊さんは久々に早く起きて朝飯を食べている

春都「しかしバスの時間がわからんな」

しかし、雨程度で日頃の日課である武偵高ダッシュ（春都命名）を休んでいいのか？

いや休んでいいはずがない

こうなったら雨に濡れようが関係ない！水も滴るいい男とか言うしな・・・

さあ行こうか、ピリオドの向こうへ！！

こうしていつも通りのダッシュ通学をしていると、今まさに出発しようとしているバスを発見。

ぎゅぎゅぎゅ詰めだな・・・あゝ乗らなくてよかった

そんなことを思っているに乗る事ができなかったらしい生徒を発見した

「つかあれキンジだな」

春都「あはは、キンジい」

キンジ「近寄るな馬鹿」

春都「ひ、ひでえ・・・そんな事よりバス乗り遅れたのか？」

キンジ「・・・ああ。くそ、いつもより早く出たつもりなんだが」

そう言うときンジは渋い顔して腕時計を見ている  
そこで俺はある事に気付いた

春都「キンジ、その時計狂ってるぞ？」

キンジ「マジか・・・やっぱあの時壊れたのか」

春都「あの時？」

キンジ「前、理子に壊されてな・・・理子のヤツが直してくれたんだが」

春都「ほお・・・とりあえず走るぞキンジ」

授業に間に合うため二人で走るが

キンジ「はると、おま・・・速過ぎだ」

春都「何言ってんだ、これでも今日はスピード抑えてるほうだ」

キンジ「狂ってる・・・」

そんな会話をしていると携帯が鳴り始めた

春都「もしm『バスジャック発生、大丈夫？』ユウか。俺は大丈夫だぞ」

ユウ『7時15分の武偵高の通学バスに爆弾が仕掛けられている模様』

春都「根拠は？」

ユウ『武偵殺しが使う電波のパターンと同じものをキャッチした』

いつの間にそんな事を調べたのか・・・

春都「了解・・・切るぞ」

ユウ『気を付けて・・・情報が入り次第また連絡する』

春都「あいよ」

そう言う俺は携帯を切りキンジの方を向く

春都「キンジ、バスジャックだ」

キンジ「なんだよ。強襲科の授業は5時間目からだろ」

どうやらキンジにも電話がかかって来たらしい  
耳を澄ませばどうやら相手はHちゃんみたいだ

『今、声したけど春都ねっ！！』

やべ、気付かれた・・・

『丁度いいわ、アンタも今から来なさい！以上』

ブツ・・・

春都「・・・なんだ？」

キンジ「さあな」

---

そして今俺はまるでSATやSWATに似たような装備をして女子寮の屋上にいる。

これはC装備と呼ばれ『出入り』の際に着る攻撃的な装備だ

屋上には同じ格好をしたHちゃん

階段の廂の下で狙撃科、Sランクのレキが体育座りをしていた

春都「・・・はあ」

なぜ俺がこんな事に巻き込まれるんだ・・・

キンジはあつちでHちゃんと話しているので俺はレキと話す事にした

春都「おっはー！レッキ」

レキ「・・・」

レキはただ目を動かして大きなイヤホンを取った

春都「また風の音聞いてんの？」

レキ「はい」

春都「へへ、風の音ねえ・・・」

俺は目を閉じて耳を澄ませてみる

雨の音、キンジとHちゃんの声、そして風の音が聞こえてくる

正直こんなことして何か分かるのかと聞かれても答えは普通NOだろ。

しかし・・・

春都「・・・なあゝんかイヤな感じがする・・・かな？」

そう呟き、軽く笑った

レキ「・・・」

それからHちゃんとキンジになにやら怒鳴り合う声が聞こえたと思

うとヘリが女子寮へと着陸した

ヘリの乗り俺達は暴走を始めた武偵高のバスを追っているようだ  
この部隊の隊長らしいHちゃんの説明は

『車内にいる全員の救助！以上！』だ。

はあ・・・冗談じゃねーってやつだよ

俺は目を瞑る。これが夢だったらどれだけ良かった事か・・・

レキ『見えました』

インカムからレキの声が聞こえた

俺達から見れば何も見えないだろう、だがレキには見える。

この子の視力は確か両方とも6.0・・・超人的だ

レキが指示した辺りへ降下していくと武偵高のバスが走っていた。  
随分とスピード出してんな・・・

アリア『空中からバスの屋上に移るわよ。私はバスの外側をチエックする。バカキンジと春都は車内状況の確認、連絡して。レキはヘリでバスを追跡しながら待機』

テキパキとそう告げるとHちゃんは天井から強襲用パラシュートを外し始めた

ビルなどで囲まれてヘリではそこまで近づくことはできないためバスの屋根にパラシュートを使い降りるらしい

春都「待て。三人同時は危ないからまず二人で降りろ。時期見計らって俺も降りるから」

ビルなどで囲まれてヘリではそこまで近づくことはできないためバスの屋根にパラシュートを使い降りるらしい

アリア『・・・わかった』

春都「はぁ・・・Eランクがやる事じゃないぜ普通・・・」

アリア『ブツブツ言わない!』

キンジとHちゃんがパラシュートを使い降りていくのを眺める

春都「・・・俺、このままヘリの中にいたいわ・・・」

レキ「早く行ってください。」

春都「わかってるって・・・タイミングをだな」

アリア『爆弾らしきものがあるわ!カジンスキーβ型のプラスチック爆弾、「武偵殺し」の十八番よ。見えるだけでも——炸薬の容積は、3500立方センチあるわ!』

わお・・・バスどころか電車でも吹っ飛ぶぞ

この状況はヤバイと分かっている。  
でも正直このまま二人が解決してくれて俺の役目がなくなればなあ

くって・・・考えていたりもする

けどそれは叶わない夢らしい。

いきなり現れたオープンカーがバスの後ろに追突したのだ

春都「ちっ・・・Hちゃん無事か？」

アリア『平気よ、でもさっきのでヘルメットが割れて使い物にならないわ、あとインカムも壊れ・・・』

Hちゃんとの会話が切れた。どうやらインカムもやられたみたいだな

春都「まあ死んでないだけマシだ」

『バリバリバリ！！うおっ！？』

その時、キンジのインカムからガラスの割れる音、銃声、後ろからは生徒達の悲鳴が聞こえた

春都「キンジ大丈夫か？！」

キンジ『ああ・・・なんとかな』

春都「そうか・・・よかった。」

聞こえてくるキンジの声にほっと胸をなでおろす

春都「今から降りる・・・行ってくるよレキ」

レキ「気を付けて」

そう宣言し勢いよくへりから飛び降りる

グラ・・・

バスが変な動きをしてなかなか落下地点が定まらない

春都「キンジ、どうした！これじゃあ降りられない」

キンジ『運転手が負傷したんだ、今武藤が運転変わるから安心しろ』

春都「了解、キンジは危ないから中に・・・」

そう言おうとしたがキンジはHちゃんを心配してか外に出てきてしまったのだ！

っ！！ヤバイオープンカーが・・・

春都「おいつキンジ早く中に戻れ！！」

駄目だ、くそっ気付いてない！！

急降下するが間に合うかどうかギリギリだ・・・っ！！

あと少し、あと少しっ！！

オープンカーに取りつけられたUZIがキンジに狙いを定め・・・

いける！！

俺はホルスターからキンジと同じモデル バレッタM92を抜き

ガンッ！ガンッ！！

銃弾は見事にUZIに命中したが、どうやら様子がおかしい。神崎がバスの側面へと転がり落ちた

くそ！遅かったか・・・

俺はバスの屋根に降りて状況確認をする

春都「キンジ、神崎は！！」

キンジ「アリアっアリアああー！！！！」

駄目だ混乱してやがる。

神崎が転がっていた所についた鮮血の跡が雨で流されていく

パァン！

パァン！

二回の炸裂音が聞こえたと思ったら、オープンカーは急にスピーンを始めガードレールにぶつかり爆発した

おそらくレキが狙撃したのだろう

見れば前方、レインボーブリッジの真横に武偵高のヘリが併走してきている。

そのハッチは大きく開かれ、膝立ちの姿勢で狙撃銃を向けているレキの姿があった

レキ『——私は一発の銃弾』

インカムからレキの声が聞こえてくる

『銃弾は人の心を持たない。故に、何も考えない——』

まるで詩のように呟く

『——ただ目標に向かって飛ぶだけ』

そのまじないのようなセリフを言い終えた瞬間・・・

レキはその銃口をパツ、パツパツ、と三度光らせた

銃口が光るたびにバスへ着弾した衝撃が伝わる

ガンッ、ガラガラッ、と何かの部品の様なものがバスの下から落ちる

レキ『——私は一発の銃弾——』

そして銃声

落ちた部品から火花が上がり飛び上がった。そして橋の中央分離帯へ・・・その下の海へと落ちていき

ドウウウウウー！！！！！！

水柱が盛大に上がった

やがてバスは止まりバスの屋根の上にはグツタリと動かない神崎、  
必死にその神崎に呼び掛けるキンジと後味の悪い俺が豪雨に打たれ  
ていた・・・

## パズルの完成

Hちゃんの傷は奇跡的に命にかかわるものではなかったらしい。  
しかしおでこに傷が出来てしまったと聞いた

春都「・・・俺がもっと早く下りていれば・・・どうなったと思う？」

武偵高の屋上、日陰で体育座りする俺。その横には

レキ「私にはわかりません」

レキも同様体育座りをしていた

春都「・・・くそ、後味悪いなあ」

レキ「・・・」

俺はなにやってんのかな本当、ここで体育座りしてたところでなにも変わらないだろ？

春都「あゝ・・・もう行くわレキ。じゃあな」

立ち上がりレキの頭を軽く撫でる

レキ「？」

春都「俺流の挨拶だ」

そう言い、俺は屋上を後にした

武偵殺しか・・・

ヤツの目的は一体なんなのだろうか。

バイクジャック、カージャック・・・自転車ジャックにバスジャック・・・

部屋に帰りユウとレイに武偵殺しの資料を一通りそろえてもらった

春都「ユウはいつから武偵殺しが使う電波？がなんとかに気付いたんだ？」

ユウ「はむ・・・相手は毎回、減速すると爆発する爆弾を仕掛ける」

今回の報酬であるケーキをパクつきながら説明をする

レイ「そして自由を奪って遠隔操作でコントロールする・・・もきゅもきゅ・・・」

ユウ「その操作に使う電波にはパターンがある。今回もそれをキャッチした」

春都「前はなんで教えてくれなかった」

レイ「もぐもぐ・・・寝てた」

ああそうですか・・・

資料を見つめていると武偵殺しとは違う資料を発見した

春都「これキンジのか？」

読めば詳しくその情報が書き記されている

ユウ「春都の友達の事よく知りたかったから」

春都「そうかい」

パラパラと捲っていると

『2008年12月24日 浦賀沖水難事故 死亡 遠山金一武偵  
(19)』

確かキンジの兄さんだったはず・・・

・・・“水難事故”

なんか気になる。

この事故についてよく調べてみた

春都「この浦賀沖水難事故・・・これがもしシージャックだとしたら？」

いや、だったらユウが電波をキャッチしているはず。

出していなかったら？

武偵殺し本人がその場にいたとしたら？

まるでパズルのピースがどんどんとはめられていく・・・そんな感じ。

ならこれに関連性は？

春都「なあ、最新の情報何かないか？」

レイ「情報？んゝ・・・あ、そういえば明日神崎・H・アリアがイギリスに帰るみたい」

春都「帰る？・・・おい待て」

バイクジャック、カージャック、シージャック・・・

武偵殺しはこれでキンジの兄さんを仕留めた

そして再び小さくなる

自転車ジャック、バスジャック・・・ならこの次に来るのは

大きなもの・・・飛行機？

確証があるわけじゃない・・・これは俺の勘。当たっているのかなんて分かるはずない

でももしこの推理が万が一にも当たっているのならば・・・

武偵殺しは再び現れる。武偵殺し本人が・・・

はは、だからどうした？

それがわかって俺になんか得のある事なのか？

『自分自身に嘘無理重ねて・・・自分を偽ってアンタ何になりたいわけ？』

・・・面倒なだけ

春都「なあユウ・・・」

ユウ「今度は何？」

春都「――」。――」

## キンジの頑張り物語（前書き）

前回の少し変更しました

## キンジの頑張り物語

春都「・・・」

静かな日だ。

平和・・・この一言が一番似合うくらいの日。

でも俺は知っている。

この静けさは嵐の前の静けさという事を・・・

携帯が鳴り、メールが来た事を知らせる

相手は・・・理子か

『ハル君元気い〜？理子は今日も元気だよ♪今日は台風が近づいて雨がスゴイ降るらしいから危ないって！！だからあんまりお外に出ない方がいいかも・・・』

まだ文面は続いているが、どうでもいいことなので流す

理子・・・お前は本当にいいヤツだよ。いつでも俺を気にかけてくれる・・・

『そういえば前にデートに誘ってくれて約束覚えてる？理子は密かに期待してるよ？』

そういえばそんな約束もしたな。・・・そのうち誘ってやるか  
そんな事を考え俺は理子に軽い返事を送った

安心しろよ理子、この中からは出ないからさ・・・絶対にな。

キンジ s i d e

アリア「うあっ!」

ナイフによりアリアの側頭部から血がほとばしる。

「あは・・・あはは・・・」

キンジ「おいアリアっ!」

くそ、どうして・・・どうしてお前が!!

「勝てる!勝てるよ!理子は今日理子になれる!あは、あはははははは!」

理子からの情報でアリアに危険が迫っていると考えた俺はアリアが乗っているANA600便へと突入。

アテンダントを脅し飛行機を止めるよう言ったのだが、この振動・・動いてる?!

アテンダントは震えながら

「あ、あの・・・ダメでしたあ」

なんて言いやる・・・

だがアリアに武偵殺しの話はできる。俺はアテンダントに頼みアリアの席・・個室へと案内してもらった

ここまでは良かったんだ。

そう、ここまでは・・・

雷を怖がるアリアをなだめていると機内に銃声が響いた

・・・俺の推理通り、武偵殺しが現れたのだ。

俺はアリアに俺の推理を話してやる

推理が苦手なアリアだったが、この話を聞き悔しそうに歯を食いし  
ばる

そこに・・・

ポーンポポーン。ポーン。ポーンポポーンポーン・・・

ベルト着用サインが注意音と共にワケのわからない点滅を始めたのだ

アリア「・・・和文モールス・・・」

オイデ オイデ イ・ウー ハ テンゴク ダヨ

オイデ オイデ ワタシ ハイッカイ ノ バー ニイルヨ

キンジ「・・・誘ってやがる」

アリア「上等よ。風穴あけてやるわ」

アリアは眉をつり上げて、スカートの中から左右の拳銃を出した

そして俺達は一階のバーを指すのだった

そこに待ちつける悪夢も知らずに・・・

---

理子「これでやっと理子は自由になれる・・・“あの子”との約束も・・・」

高揚したような声で理子は自分の身体を抱きながら笑う  
何言ってるんだ・・・

キンジ「しっかりしろ!」

アリア「う……」

くそ、切りつけられた傷が深くて血が止まりそうにない。どこかで治療しなければ……

俺はアリアをお姫様だっこで抱えて逃げようとする

が、

理子「どこ行く気かなあ？」

どうやら無理なようだ。

前を向けば理子が手に持ったワルサーP99をこちらに向けている

キンジ「……どうしてだ、どうしてお前が!!」

理子「キンジはそればっかだな。さっきも言ったよね？私は私にためにオルメスを殺す……イ・ウーで手に入れたこの力で!!」

理子・峰・リュパン4世

先ほど理子はそう名乗った。武偵殺しは自分だと、あれはプロローグを兼ねた遊びだとそう言った……

4世と呼ばれる事を嫌い、自分を認めてほしいためにアリアを殺そうとしている……

意味がわかんねーに決まってるだろ!!

理子「はあ……キンジはお兄さんの話を聞いただけで役に立たなくなるし……せつかくオルメスとくつつけてやったのに」

何か逃げられるチャンスはないか？ほんの少しでもいい、隙を作れば・・・

理子「考えてる事丸わかり過ぎ。まだ逃げようとしてるわけ？無理むり」

キンジ「・・・」

理子「いい眼だよキンジいゝ・・・必死に考えるキンジも最高」

両手は塞がれ、銃は粉々・・・  
バタフライナイフ？あのアリアが一撃喰らうような相手に勝てるはずない・・・  
もう終わりなのか？

理子「でもこれで終わり・・・——死ね——」

パン！

銃弾がこちらに飛んでくるのが分かる。

この光景前も見たん・・・そうか、バスジャックの時だ  
あの時はアリアが命がけで俺を助けてくれた。なのに俺は・・・

俺はアリアになにもできずに死ぬのか？

そんなの！！

「——ダメに決まってるよなあ？キンジ——」

キンジ「え・・・」

自分の目の前に割り込む人物。

俺を親友と呼び、いつも馬鹿な事をしているヤツ

「くう・・・初めて当たったが防弾制服でも当たれば痛いもんだな！！」

だけど本当はスゴイヤツ・・・

キンジ「春都！？」

春都が目の前にいた

春都「よう。キンジの頑張り物語はまだまだ始まったばかりだろ？」

来たぜ？」

「さあ主人公交代！理子、デートのお誘いに

## キンジの頑張り物語（後書き）

はしより過ぎて意味分からん・・・

## マトリックス的なあの技（前書き）

いまさらですが

神崎を神埼と書いていた鈴ノ音をお許しください！！

## マトリックス的なあの技

キンジ「ば、馬鹿野郎っ！なにやってんだ！！」

どうやらキンジは俺が前に飛び出した事を怒っているらしい

春都「初めて当たったが・・・痛てゝな・・・なにつて“神崎”みたくキンジを助けたくて」

当たった場所を確認・・・多分神崎の頭を狙っていたのかな？

春都「キンジとのお話するのは大好きだが、早くしないと死ぬぞ？」

キンジが抱えている神崎の頭へと目をやる

ナイフで切りつけられたか。

血がひどい・・・側頭動脈をやられたか？

あらゆることが頭をめぐる

とにかくあのままだと確実にヤバいのはあきらかだ

春都「とりあえずそれを連れて逃げろ」

キンジ「お前はとうすんだ！今の理子はヤバい！！お前も逃げろ！！」

随分と焦ってるなキンジ、何を見たんだ？

春都「却下、お前ら二人をこのバーから逃がす。マキロン貸してや

るか？」

キンジ「いらねーよ！！とにかく逃げ『武偵憲章第一条！！』……仲間を信じ、仲間を助けよ……」

春都「そう言う事だキンジ、信じる（ニコッ）」

キンジ「くっ！悪い、頼んだ！！」

そう言ったキンジは神崎を抱き逃げた。

理子はどうやら追いかける気はないみたいだな……

春都「よお理子……いや武偵殺し？リュパン四世のほうがいいかな？」

俺は笑う

---

キンジ「はあはあ……」

くそ、あの目はマジの時だ。

俺は走りながら思う

入試験の時に一度だけ見たあの目……  
どうしようもなく恐怖を感じるあの目……

なんだ？

この不安感は…

いやな胸騒ぎがする…

---

理子「……」

理子は何もしゃべらずに俯いている。

微かに手が震えているのは気のせいかな？

理子「……なんでハル君がここにいるわけ？」

微かに聞こえた声

理子「なんでなんでなんでっ！？なんで春都がここにいるっ！？答えるよ！！」

春都「ん？俺さあ実は旅行しようとしてただっ……で乗った飛行機が偶々これだっただけ」

もちろん嘘だ。武偵殺しの件を確かめるためにユウに頼んで予約を

してもらったのだ

さらに言つと、武偵殺しの目星もついていた

その優しさが、甘さが仇になったな理子・・・キンジの時計の件もそうだ。

俺があの場合にいなかったら気がつかなかったぞキンジは・・・

理子「嘘をつけ！！乗客名簿のなかに春都の名前なんかなかった！  
」

春都「あらら・・・バレた？」

はあはあ・・・  
随分と興奮してるな

春都「まあ俺をおバカだと思って甘く見てたのが大きな間違いなん  
じゃね？」

理子「お前を馬鹿だと思った事なんか一度もない。お前みたいなヤ  
ツが一番危ないって事も知っている！」

理子「だからお前に近づいたんだよ！邪魔しないように！私の言う  
事を聞くようにするために！！」

春都「ふん・・・まあ知ってたけどね 色仕掛けへハニートラッ  
プ》ってやつだろ？知ってるに決まって引つかかってんに決まっ  
てるじゃん」面白そうだし・・・」

理子「・・・」

春都「でも結構ドキドキはしたぞ？よかったな4世」

ギリっ・・・

理子「・・・そこをどけ・・・」

春都「イヤだ」

理子「どけ!!」

はぁ・・・子供かお前は・・・

春都「通りたいなら俺をさっきの神崎みたいすればいい」

カチャ・・・

ワルサーP99が俺へと向けられる

だが、手の震えは先ほどより強くなっている

理子「ど・・・け・・・」

春都「？どうした、撃たないのか？」

理子「（ギリっ）っっ!!」

パンッ!

銃弾は俺に向かって飛んでくる

春都「—————だけどさ。」

それを俺は上体を後ろに反らし・・・かわす

春都「今日の俺は少々本気だぞ？4世さん」

さあどうしてやるかな・・・やべおもしれえ・・・

## マトリックス的なあの技（後書き）

感想を書いていただきありがとうございます！！

すごくうれしかったです！

わからない気持ちと刺さる思い（前書き）

なんか・・・

よくわかんなくなってきた・・・

わからない気持ちと刺さる思い

撃ちたくない・・・

最初はただのウザい存在だった。

私の目的に支障をきたす存在かもしれないという認識だけだった

楽しそうに笑う顔が嫌い、優しく話しかける声が嫌い・・・

嫌いだったのに・・・

彼と・・・春都と話せば話すほど、いればいるほど、もっと話したくなつて一緒にいたくなつていった

だから

私はこんな状況を望んでいない

春都が危険にならない様に極力動いた。だけどダメだった・・・

私の目の前に春都がいる

私が一番望んでいない事。

思い通りにいかない事にも春都の言動や態度にも腹が立った

楽しそうに笑う春都の顔を見るのが嫌だった

そして私は感情のまま銃の引き金を引く・・・

パン！パン！

春都「つと・・・」

銃弾が飛び交う

未だに被弾した回数は初めの一度だけ

春都「どうした4世様あゝ？」

理子「黙れ！！」

こちらへ突っ込んでくる理子を見る

思い出すのは神崎の傷。あれは完璧に刃物によるものだ

さあ神崎にどうやってあの深い一撃を与えた？

しゅら、しゅるるる！！

春都「！！」

理子ツーサイドアップのテール片方がまるで生きているかのように動き、そしてどこかに隠したナイフを握り俺に襲いかかった

シャッ！

春都「っ！！」

一撃目はなんとか避けたが、反対のテールに握られたナイフが迫ってくる

キイインっ！！

俺は制服の裾に隠したナイフでその攻撃を防いだ  
金属と金属がぶつかり、耳障りな音がする

これでひとまず安心ならいいのだが、理子はさらに両手の銃で俺に向け

パン！パン！パン！

春都「ちっ・・・」

転がるようにして逃げたが、なんとも厄介な攻撃だ・・・  
接近戦では四方向の攻撃に対処しなければいけない

理子「避けてはばかり？春都」

春都「そんな事ないぞ？」

俺はホルスターからベレッタを抜き  
そして一気に駆ける！！

理子「お前バカあ？」

理子がそう言うのは無理もない、この場合接近戦を挑むのは明らかに自殺行為・・・  
だが俺はあえて理子につっこんだ

ある時は理子の銃弾を交わし、ある時は襲いかかるナイフをベレッタで受ける

春都「じゃあこんなのどうだ？」

ガスっ！！

理子「かはっ！？」

勢いをつけて理子の額へとヘッドバットを決める

グラつく身体に蹴りを入れようとしたが、理子が後ろへ下がり回避

春都「身長差があるから効いたか？」

理子「はあ・・・はあ・・・！」

ガチャ・・・

持っていたワルサーP99が両手から落ちる

春都「フラフラしてんだから動くな」

さっきので脳が揺れたのか。フラフラと今にも転びそうになっている  
なのに明らかな敵意を俺に向け俺へと近づこうとする

理子「私は今日、理子になる・・・んだ・・・本当の・・・理子に  
っ!」

獣のような鋭い目で俺を睨む

理子「春都にわかるか!?自分の名前を呼ばれない苦しみが!認め  
てもらえない苦しみがつ!」

春都「・・・」

理子「どいつもこいつも4世!4世!私は数字じゃない!遺伝子な  
んかじゃない!」

ヒュッ!ヒュッ!!

ナイフが複雑な動きをして襲いかかる

春都「言いたい事はそれで全部か？」

理子「ああ！？春都、お前も気も食わないっ！！」

春都「くっ・・・！」

理子「その余裕そんな態度が！笑顔が！しゃべり方が嫌い！！お前を巻き込まないようにしてやった・・・忠告もした・・・それなのに！それなのにっ！！」

ガシャ！

あまりの勢いに握っていたベレッタが吹っ飛ぶ  
これで受け止められる物は無くなった・・・  
ならこうすればいいだけだ

バシィィィ！！

俺は暴れるナイフを両手で受け止める

春都「言い終わったな？」

理子「っ！！」

ググっ・・・

自然にナイフを握る手が強くなり、先ほどよりも血の滴る量が多くなる

軽く本気を出してひねり潰してお終い・・・最初の考えは何処へやら

コイツに銃弾の一発も撃ちこめない  
撃たないのではなくて撃てなかった。  
撃つチャンスもタイミングもあつた、なのに無理だつた

頭突きで精一杯とか  
俺はそんなに優しい人間だつたか？

ガチャンツ！

ナイフを奪い取って投げ捨てる  
これで終わりか？いや終わってほしい・・・

理子「あ・・・」

バランスを崩したようにこちらに倒れそうになるのを俺は咄嗟に受け止めようとした

春都「おい、大丈夫k・・・」

普通の生活に戻りたい。皆が笑っている日常に。  
・・・それが無理な事もわかつているんだけどな

もたれ掛かるように俺に倒れ込んでくる・・・

「——ばあゝか——」

ドスっ・・・

囁くようなそんな声を聞いた瞬間

俺の腹に激痛

春都「うつ・・・！！」

ほらな？終われないし、戻れないんだよ。

俺は腹部に広がる痛みを感じながら思った・・・

刺されるとどの位痛いのか・・・（前書き）

内容ぐっちゃです・・・許してくださいあ

刺されるとどの位痛いのか・・・

良く見れば下腹にナイフが刺さっている

春都「・・・くは・・・」

理子のヤツ、もう一本隠して・・・

ボタボタ・・・

手の出血なんてもんじゃないくらいの血の量。制服も紅く染まってい

や、べ・・・これは流石にキツイ・・・

理子「くふ、くふ・・・」

くそ、ちゃんとシャツはズボンに入れなきゃってか？  
はは、笑えね・・・

わざと懷に潜り込んで防弾制服の隙間を狙って刺すとか。相手が俺だからやったわけか

春都「つ・・・」

良かったな理子、これでやっと二発目の攻撃成功だ。しかも致命傷に近い傷

ぎゅ・・・

理子「!!」

腕をまわして抱きしめる

お前の話は聞いた、次は俺の番だろ？

理子「離せ」

暴れて抜けだそうとする理子

俺はさらに強く抱きしめ抜け出せないようにしてやる

ググッ・・・

春都「俺、には・・・遺伝子とか数字とかよくわからん」

ボタボタと地面に血が垂れる

春都「認めて、もらうつ・・・なんで他人に認めてもらうつ必要があるんだ」

春都「お前はお前・・・理子だろつ・・・」

急に身体力が抜け、膝をつく

春都「ぐ……」

理子「うぎ……春都には何にも関係ない……なのに春都はここに来て、私の邪魔した……」

春都「はぁ……はぁ……」

意識が朦朧とする。理子の声が頭の中で反響するように聞こえる。刺された場所はいかわらず焼けるような感覚……

理子「倒れちゃえばいいじゃん……オルメス達のことなんか諦めてさ」

理子「痛いでしょ？ 苦しいでしょ？ ツライでしょ？——他人のために死ぬなんて馬鹿みたいでしょ？——」

春都「……」

ギユ……

返事はしない、そのかわりにさっきより強く理子に抱きついた

確かに俺は他人のために命賭けられるほど勇者じゃない

それでも……人には絶対守りたいモノってのが2、3個くらいあってもいいもんだろ？

理子「……そう」

ガスッ！！！！

春都「がつ！？・・・」

理子の膝が俺の腹に入っ・・・

ドサ。

理子「ならお前はここで終わりだ。春都」

春都「・・・」

理子が俺を見下ろしながら言う

その手には血塗れのナイフが・・・

おい、待て理子・・・

意識が遠退いてゆく

理子・・・お前、そのナイフ・・・

ここで俺の意識は完全に途絶えた。

理子「・・・春都に守りたいモノがあるように、私にも守りたいモノがあるんだよ」

---

刺されるとどの位痛いのか・・・（後書き）

長らく申し訳ありません・・・

鈴ノ音も受験シーズンに入り全然書けていません・・・  
それにテストも近く泣きそう

## 俺のヒーロー

春都「・・・星、綺麗だ」

一人横たわり星を見る。台風も過ぎてよく空が見えるな

飛行機ジャックの事件は俺が目覚めた時には解決しており、俺は病室のベットで寝ていた。

その部屋にはキンジ、そして神崎の姿もある

そうか、キンジは神崎を守ることができたか・・・

俺はキンジ達を起こさないよう静かに病室を後にした

医者からは絶対安静と言われたが、とりあえず走って逃げた。

病院に搬送された時は出血などがひどく危険な状態だったらしいが、誰かが応急処置をしてくれてあったらしく、そのおかげでなんとか助かったとか・・・

病院を抜け出した後は一人、公園のベンチでぼくとして過ごした。時間が経つのは早く、空には綺麗な星と満月が見える

俺はポケットから携帯を取り出し電話かける

数秒のコールの後

春都「ようキンジ、今どこにいんの？」

キンジ『・・・家だよ』

聞こえてくるキンジの声は少し低い

春都「元気かよ」

キンジ『それはこっちのセリフだ。お前なに勝手に病院から抜け出してんだよ』

春都「病院はなんか嫌いなんだよ」

キンジ『怪我・・・大丈夫かよ』

春都「心配すんな、大丈夫だからさ」

キンジ『・・・そうか』

春都「俺はお前の方が心配だけど？」

キンジ『なにが』

春都「お前なんで家にいるわけ？神崎、ロンドンに帰っちまうだろ？」

キンジ「・・・俺には関係ない」

・・・あほキンジ

春都「手を伸ばせば届くのに、掴めるのに・・・何でしねえんだよ。  
・・・俺には出来ない事をお前はできるのに」

俺は自分の守りたいモノすら守れない  
だけとお前は違う、キンジはそれができる。できるのに・・・

キンジ『春都・・・』

春都「やれる事やればいいんだよ、後悔なんざ後にしろ。・・・まだ俺の言葉は必要か？」

春都「ウジウジしてんじゃねーぞ・・・俺のヒーロー」

キンジ「俺はお前のヒーローになったつもりはねーぞ。・・・用事ができた、電話・・・切るぞ」

春都「あいよ」

ツー・・・ツー・・・

春都「全力で走ってこいキンジ・・・そんで掴んでやれ、神崎が必死に伸ばしてる手をな・・・」

俺は一人呟く。

そして月に向かって手を伸ばす

春都「遠いな・・・遠くて掴めない。やっぱり俺はヒーローにはなれないか・・・」

俺のヒーロー（後書き）

テキストで申し訳ない。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0655w/>

---

緋弾のアリry ~春に恋するお年頃~

2011年12月1日23時54分発行